基調報告：「二十世紀の日中関係」

小島晋治

二十世紀の日中関係というのは非常に内容の濃いもので、短い時間で基調報告をするのは、はなはだ困難です。およそのことは不十分ではありますが、差し上げた印刷物にありますので、そちらに任せるとして、私は三つの問題を取り上げたいと思っています。

一つは留学生の問題。もう一つは日本人が明治以来中国人あるいは中国というものをどういうふうに見てきたのか、特に中国という国家をどのように見てきたのかという問題。もう一つは日米の安保条約の再定義問題に至る、つまり現在の日米同盟に絡んで二十世紀の日中関係の中で重要な役割を果たした二国間同盟、すなわち日英同盟、あるいは多国間同盟、三国同盟、そういうものの歴史を踏まえて、現在あるいはこれからの日米同盟というものを、どう考えたらいいのかということについて申し上げたいと思います。

中国留学生と日本

まず、最初に、なぜ留学生の問題を取り上げるのかといいますと、実は十日ほど前に中国大使館の留学

生問題を管理している大使館員と話をする機会がありました。彼がいうには、この八〇年代に入って中国が改革開放政策をとってから、非常にたくさんの留学生が日本に来ている。神奈川大学にもかなり来ておりますし、私自身も神奈川大学で二人、それ以前の大学で十人ほどの中国人留学生を指導教官として担当しました。

ところが、このようにして日本に留学する留学生の多くは、大概が日本が嫌いになって帰ってきているという話を彼から聞きました。これはアメリカ留学生と非常に違うので、アメリカと中国との国家間関係は日中関係よりも悪いけれども、しかしアメリカへ留学した中国人は大概アメリカ人及びアメリカが好きになって帰ってくる。非常に明確な対照をなしているのだという話を聞きました。全く同じ話を二年前に東京に駐在する中国の新聞記者から聞いたことがあります。

日本のジャーナリズムはあまりこの問題を取り上げておりませんが、私はこれはかなり由々しい問題だと考えております。すなわち、国家と国家、あるいは政府と政府の関係というのは、移ろいやすいが、信頼と友情で結ばれた人間のネットワークは揺るがない。揺らぐ国家間関係というものを、前向きに支えていく大きな力を持っているのはそれだと思います。

かつて日本は明治の後半期に非常にたくさんの留学生を中国から迎えました。しかし、中国留学生の信頼をかち得ることに失敗した歴史があるわけです。このことを二度と繰り返さないためにはどうしたらいいかということを考えたい。まずその失敗した経験の方を考えてみたいと思います。御承知のとおり日本は唐の時代、宋の時代、明の時代に、多くの学者や芸術家や僧侶を中国に送りました。あるいは彼らが中国に行きました。彼らが中国で学んできたものが日本の文化を豊かにする上で、非常に大きな役割を果たした。恐らく日本人の中国に対する親近感は、こういう時代につ

くられたことは確かであります。

それが逆転したのは日清戦争であります。日清戦争で、中国はそれまでちっぽけな中国文化圏内の小国に過ぎないと考えていた日本に破れ、その敗戦をきっかけにして中国は膨大な借金を、つまり日本に払う賠償金を支払うための借金を外国の銀行からし、またロシアがフランス、ドイツとともにやった遼東半島の返還を要求する三国干渉を契機にして中国は列国の事実上の半植民地勢力圏に分割されていく動きが進むわけです。そういう中で中国で初めて本格的なナショナリズムが生まれ始め、日本の明治維新の変革をモデルにして、中国を自己変革していこうとする動きが始まる。最初の留学生として清朝政府が一八九六年に十三人の留学生を派遣した。これに続く清朝の二十世紀に入ってからの新しい政治、新政という改革の動きの中で、湖南、湖北、江蘇、浙江などの開明的な官僚が地方長官をしているところから、非常にたくさんの留学生が日本に送られます。

日本もまた中国からたくさんの留学生を受け入れることを望む。それはなぜかというと、日清戦争後列強の勢力が中国にずっと広がっていく。特にロシアがいわゆる満州――ここでお断りしておきますと、満州とか満州人とかあるいは支那人とか、そういう言葉は現在では使ってはならん、使わない方がいい言葉、中国人はこれを非常に嫌いですから、相手が嫌う言葉は使わない方がいい。しかし、歴史的な文献として文章を引用する場合には、満州とか支那人という言葉が出てくるので、どうぞこの点は御容赦いただきたいと思います――に領地を専有する。これは日本にとっては非常に危険だ。そのためには中国からたくさんの留学生を招いて、中国に日本の影響力を広げたいということが、日本の政府の側にあるわけです。

こういう日本の国家的利益の見地から留学生を招くということを、一番はっきり明確に述べているのは、

当時、清国駐在の特命全権大使―矢野文雄です。この人は政治小説なども書いておりますが、彼は一八九八年に福建省に日本の鉄道の敷設権を獲得する交渉を、清国としたが、成功しませんでした。

その交渉に当たって、清国政府が喜ぶことをやはり日本はやった方がいい。それは留学生を受け入れることだ。もし、留学生を日本の方に受け入れて日本の軍事を学ばせれば、清国の兵器の大半は日本製になるだろう。さらに、軍人たちの多くは、日本に対して親近感を持つようになるだろう。工業も同じであって、日本の技術を中心に中国に入っていけば、日本の市場が非常に拡大していくと、彼は述べました。つまり、日本の国益という見地から多数の留学生受け入れを主張した。

もちろん、こういう見地からだけではなくて、いわばより純粋といいますか、違う見地から中国の留学生を受け入れるべきだという人もおります。その一人は徳川時代に五稜郭に榎本武揚とともに陸軍奉行として立てこもった大鳥圭介です。彼は明治政府になってから中国の公使などをやったりしたことがあり、中国留学生をもう少し大事にしろということを、一八九九年にある文章で書いています。

それによると、「願わくば我が文武関係者は中国人の教育に誠意を尽くし、衣食住の便宜を与え、日夜誘掖（ゆうえき）して、誠実な友情を尽くし、昔時に受けた中国からの恩恵に報いるべきだ」と彼は書いているのです。立派な考え方です。

このようにして、一九〇四～一九〇五年、日露戦争のときには約八千人の留学生が日本にやってまいります。その圧倒的多数の六割くらいは私費留学生で、しかも多くは速成教育といいまして、ごく短期間の教育を受けて中国に帰っていくのが多かった。これについて、きょう司会をされている大里さんが、この間の杭州大学とのシンポジウムで報告されました。しかし、

このようにして来た中国の留学生は、非常に日本でつらい思いをするわけです。なぜかといいますと、日清戦争の前後から日本人の中には中国人に対する差別、侮蔑意識が非常に広がっておりました。最初に日本に来た十三人の留学生のうち四人は一カ月で帰ってしまいました。それは道を歩くと子供から大人まで、トンビカン、トンビカンといって、トンビというのは豚のしっぽという弁髪をさす語、それに漢という字をつけてからかわれる。あるいはトンビメ、やっこという罵声を浴びせられる。日清戦争時に戦意高揚の演歌の中で、チャンコロだとか、チャンチャン坊主などという文句が広がって、それを中国人に日本人が浴びせかけるということがあったわけです。

差別の構造

そういう中で非常に多くの留学生が傷つく。当時既に日本は台湾を植民地領有していた。これは戴さんの専門領域ですが、台湾を領有するに当たっては台湾住民の激しい抵抗にあって、もう台湾は離した方がいいという議論があるくらい激しい抵抗を受けるのですけれども、それを経て台湾を植民地領有している。にもかかわらず、日露戦争のときには中国の留学生の大多数は、日本の勝利を期待するわけです。それは歴史的に中国にとっては、北からの異民族の侵入が非常に大きな脅威であり続けていたからです。ロシアの満州占領は最大の脅威だと。それから、日本人は同じ黄色人種である。あるいはまた日本は既に立憲改革をやった立憲国家で、ロシアは専制国家だ。中国の立憲制のためには日本に勝ってほしいという、さまざまな声があって、その当時には中国の留学生の多くはロシアに対しては日本びいきであった。

また、日本人の中にも日本人の中国人に対する差別、蔑視を厳しく批判する者もおりました。代表的な

人は、孫文の革命運動を生涯をかけて支持した宮崎滔天、それから魯迅が生涯尊敬した仙台医専時代の医者で藤野先生という人がいます。藤野先生に限らず、日本人の中にはそういう善意を持って中国人留学生を教育した人がもっとたくさんいたに違いない、あるいはそうあってほしいと僕は思っています。宮崎滔天は一九〇六年に書いたある文章の中で次のように記しています。

「我が日本の当局者、政治家、教員、商人、下宿屋の主人、下女、すり、泥棒、淫売婦諸君よ、諸君が日夜トンビカンつまり豚のしっぽカンとして軽侮し、嘲笑し、詐取し――だまし、搾取する支那留学生は、まさに来たらんとする新支那国の建設者なり。彼らははずかしめを忍んで、諸君の侮蔑を甘受す。しかも、心中に一遍のこれをうらむものでもなからんや。彼らを侮辱するは、彼らの侮辱を買うゆえんなり」。

つまり、留学生を侮辱すれば、この留学生たちは中国に行けば重要な役割を果たす人々である、彼らから侮辱されることになるのである。これをやめよということを非常に厳しい言葉で述べています。

また、先ほど言った藤野先生は、日本の盧溝橋事件が起こる少し前、魯迅が亡くなった直後だと思うのですが、魯迅を悼む文章を書いています。これはとてもいい文章です。こういうことをいっています。これは『文学案内』というものに書いたものです。「慎んで周樹人様を思う」、周樹人というのは魯迅の名前ですから、魯迅を思うという文章なんです。その中でこういうことをいっています。

「悲しいことに、日本人がまだ支那人をチャンチャン坊主と言いののしり、悪口を言うふうのあるころでしたから、同級生の中にもこんな連中がいて何かと白眼視し、つまり魯迅をのけ者にした模様があったようです」。

つまり、魯迅が藤野先生を非常に尊敬したのは、そ

ういう日本人の学生たち、あるいはひょっとしたら教師もいたかもしれない。そういう侮蔑の中で藤野先生に出会ったからこそ、藤野先生が魯迅に生涯、非常に深い印象を与えたのだろうと思います。それで彼は自分は支那の先哲つまり先賢、老子とか孔子を尊敬すると同時に、かの国の人を大切にしなければならない、そういう気持ちを持っていた。それで魯迅に接したと書いています。非常に救われるような気持ちで、もし藤野先生のような人が日本人の圧倒的多数を占めていたら、日本と中国の関係はもっと、あんなふうなことにならないで済んだのではなかろうかと思います。

さて、現在なぜ中国人の留学生が日本を嫌いになって帰っていくのか。率直にいって、私はその話を聞いて意外でありました。私が接しているのはごく一部の中国の留学生で、しかも人文系であって、その留学生たちと接触している限り、まさか彼らが日本を嫌いになって帰っているというふうには思えなかったのです。これは私の不敏の致すところというよりしようがない。しかし、事実としてそういうことが今あるとするならば、一体なぜ中国の多数の留学生、かつて中曽根首相がこの一九八〇年代に十万人のアジア各国の留学生を迎えるという大風呂敷を広げたことがあって、たくさんの留学生が来たわけですけれども、この彼らがどうして、その多くが日本を嫌いになって帰っていくのか。これは私にもよくわからないところがある。ある程度見当がつくところもありますけれども。このシンポジウムの中でその問題について、皆さんの御意見を伺えれば大変にありがたいと思います。これが第一点です。

日本人の中国人観

第二は、日本人の中国人観、あるいは中国観、中国という国家についての見方という問題であります。日

本は一九二八年に張作霖を爆殺するわけです。東北つまり満州に引き揚げてくる張作霖を爆殺した。その爆殺した河本大作という関東軍の大佐の中国での供述書が、最近『This is 読売』という月刊誌に出て、なぜ河本大作がというよりは関東軍が、この張作霖を爆殺したかというのが大分明らかになってまいりました。

そして続いて一九三一年には、張作霖の子供の張学良の東北軍がやったと偽って、実は関東軍みずからが鉄道を爆破して、これをきっかけにして全面的な満州事変、いわゆる九・一八事件を起こして満州国をつくった。非常に強引ないわば乱暴な中国に対する軍事的な干渉を、なぜ日本人はやったのかということを考えますと、私はやはり日本、あるいは日本の軍部、政治家の中にあった中国人、中国という国家への見方というものが、大きな役割を果たしているように思います。

東方会議という満蒙いわゆる満州、蒙古に対する政策を決定する重要な会議が、一九二七年に開かれました。これは蒋介石が南京に政府をつくって、次第に中国全土を統一する、共産党とは既に分離している、抗争しているわけですけれども、そういう動きに対して満蒙政策を決定するための重要な会議であります。その直前に、関東軍参謀の斉藤恒という人が、陸軍技官あてに「満蒙政策に関する意見」という意見書を出しています。この中で彼はこういっている。

「支那人は支那人として見るべし。某曰く、支那人は類人猿なり」と。支那人は人間ではない、そういっている。「批評は酷なりといえどもまさに的中するものというべし」と。その批評は当たっていると彼はいっています。「外国人の（つまり日本人などを含めて主に都市で）接する支那人とは、支那人にあらず。むしろ外国人に近し」、「革命以降、支那に横行するいわゆる新支那人（つまり近代化した中国人）は、ことごとく偽支那人で外国人なり」と。そして三番目に、「支

那人は統一の力なく、したがって、政府は国民を統一し得ない」。この点が非常に重要なところです。

これは日本人の明治以来ずっと一貫して続いている中国への見方なんです。私は最近、幕末以来明治末までの日本人の中国紀行の記録を集めた本の監修をし、多くの日本人が中国を旅行して書いた記録を読みました。有名な人も無名の人も、非常に多くの人が書いているのは、中国人というのは徹底的に私利私欲を追求する集団だ。私利、私の利益の追求が彼らの宗教である。そして、民族意識とか国家意識というものは彼らにはない。このことを、多くの日本人が書いています。例えば、日本で議会政治の神様といわれている人に、尾崎行雄という人がいます、咢堂という人です。神奈川県の相模原の出身です。日本では非常に評価の高い政治家です。

彼が一八八四年に『時事新報』の記者として中国を旅行したときに書いている文の中で、こういっています。

「けだし、支那人はただ銅銭あるを知って、（つまりお金のことだけを知って）、国家あるを知らず。ただ生の愛すべきを知って、名の重んずべきを知らず。戦い起こればまず走る（逃げる）。また敵にあえて死するの忠肝を備うるもの無し。この輩をして技芸に習熟せしめるも、なお攻守の危険を冒してその職務を全うするあたわざるべき」と。

そして、彼は明治初年に日本が台湾に出兵したときに、清国の兵隊の多くが、どんどんすぐに日本に降伏して、自分の身を守るということも例として挙げています。明治七年、日本軍が台湾を討つと、駐屯の新兵で自国の情報を我が軍に通ずる者が多く、これに一～二元の金を与えれば喜んで自国軍の秘密を内通したりした、と書いている。

彼は日清戦争のときに、この清国という国は滅びる。なぜならばこの国の人には民族意識、国家意識がない。

それから官吏というエリートは泥棒だ。国家の富を泥棒することしか彼らは考えていない。それから武器は大きな音ばかりたてるけれども、こけおどしで実際の役には立たない。だから、こういう国は近代においては存立できない。滅亡は不可避だというふうにはっきり書いています。ただし、彼らは国家に頼らないで生きていく、私利を追求する非常に強いエネルギーを持っている。だから、国が滅びても、彼らは世界中に広がって、経済的には成功するに違いない。こういう意見を述べています。

徳富蘇峰の中国観

もう一人挙げますと、徳富蘇峰という人がいます。蘇峰は熊本県出身で、日本では非常に影響力のあった人ですが、彼は日露戦争の翌年に中国全土を旅して感想を書いています。

「支那に国家なし」というのが、彼の見方です。「支那には家ありて国なく、支那人には孝ありて忠なし」、「今日において支那人に国家的観念のなきのみならず、従来とも国家的観念らしきものはほとんど見出しかねそうろう」と。そして彼らが非常に夢中になって追求するのは、個人の私利だ、金だと述べています。

このようにして国家的意識、民族意識がないから、外国軍が来て自分の家や故郷を前の支配者よりもよく守れば、彼らは外国の支配者だろうが何だろうが、喜んでついてくるのだということを尾崎も書いています。だから、もしも日本以外の国が中国に行って、そのようにすればこれは容易に外国の支配を受けることになる。その前に日本が…ということになるんです。このような中国観が日本の張作霖爆殺事件から満州国建国に至る非常に強引な軍事干渉、傀儡（かいらい）国家の建設ということの背景にあった考え方です。

なお、中国人に国家意識がない、民族意識がないと

いうのは、明治以来満州事変のころまで続いただけではなくて、現在でも日本人の中にあります。つい先ごろ、私の大学の一年後輩である国立大学の教師をしておりました人が、『妻も敵なり』という本を書いて、かなり評判になりました。つまり、中国では奥さんも敵だと。これを書評した人が非常にショックを受けたというようなことを書いていました。しかし、中身は要するに中国人というのは国家意識、民族意識というのがない、自分の利益を追求するだけだという明治以来の見方をより精緻にしたものです。そして、支那、中国の国家というのはかつては皇帝の私有物で、現在は共産党の私有物だ、という論理です。彼は相手はそういう国であって、近代的な国民国家ではないんだという認識のもとでつき合えということを、この本の中で書いているのです。ですから、これは非常に根強い日本人の見方です。

石橋湛山の卓見

しかし、その時代においても真正面から、こういう考え方を批判し、満州事変及び満州国を徹底的に非難した非常に優れた先人がいます。それは、戦後五〇年代に自民党の首相をやった石橋湛山という人です。石橋湛山は、この満州事変の直後にこれを批判する、非常に明確な文章を書いています。大要次のような内容です。

日本は満州蒙古の特殊権益を守らなければいけないという議論がある。権益擁護が絶対的に必要だという議論があるが、それでは支那の政府と国民は納得しないに決まっている。一～二度は力によって屈服しても、しぶしぶ承諾する形を取っても、いつかは必ず問題が起こる。これはかの二十一カ条要求の結末を見れば明らかではないか。いかに善政をしかれても、よき政治をしかれても日本国民は日本国以外の支配を受け

ることを快しとはしない。それと同じように支那国民にもまた同様の感情の存することを認めなければならない。しかるに我が国の満蒙問題を論ずる者は、往々にして右の感情の存在を支那人に向かって認めない。

他国であれ善政さえしけばいいのだというふうに考えている。明治維新以来の世界のいずれの国にも、こういう考え方は通用しない。かつて愛国心を鼓吹してきた我が国民の、これはあまりにも自己反省に欠ける態度ではないか。つまり、自国では愛国心を鼓吹して、中国人には愛国心はない、それを無視するというのは全く一面的だと。彼らの胸中では、清朝時代に全く消滅するかに見えた国民意識が、驚くべき強烈さをもってよみがえるだろうと。

湛山も明清の時代には中国人の中には国民意識は消滅していたということは認めている。それは彼ら中華民国の建設者、例えば孫文たちがいかに近年国民教育に意を注ぎ、賢明にもこれまた明治維新以来、新日本の建設者らが行ったと同様の方法であるが、教育に力を注ぎ、もって国民の愛国心を養い、国家の統一を図るに努めつつあるかを見てもわかる。かかる教育はいまだかつて支那に行われた例はないであろうが、それだけにまたその効果は前例を見ざる強大なものがあるであろう、と彼は見透している。

つまり、中華民国が成立して以来、中国はもうきのうの中国ではないのだと。そういうナショナリズムが、強くよみがえっていて、教育も徹底しているのだ、そこを見失うとえらい失敗をするぞという警告を彼はしているわけです。

湛山はいわば生粋の自由主義者でありますけれども、そうではなくて、いわゆる天皇主義者で非常に天皇を崇拝していながら、日本の韓国併合に真っ向から反対し、日本の中国との戦争に真っ向から反対し、山東のドイツ権益の継承に反対した人がいます。

福岡の箱崎神宮の葦津耕次郎という宮司ですが、か

れは頭山満や宮崎滔天と同じく、孫文の革命運動を終始援助してきた高知出身の萱野長知と非常に親しい関係のあった人です。彼は韓国併合に際して、真っ正面から憲兵司令官の明石と論争をしています。外国の支配を受けて朝鮮人が幸せになるはずがない、必ずそれに対する強い反発が出てくるのは当然のことだと述べて併合に反対する。

そして、満州事変が起きて、日華事変が起きると、満州のことを日本は王道楽土、つまり王道の支配する楽しい土地だなどというが、実情は横道、つまり間違った道、不正が横行している所だ。そして、国境を接して親しくこの実情を知っている、つまり満州の実情を王道楽土どころか不正が横行しているところだということをよく知っている支那人などとしては、日本が支那に対して日支親善ということは、支那を日本の奴隷とすることであると考えるのも無理からぬことだと思う。

「これが、今時事変において、有史以来いまだかつて統一のできたことのない支那四億の民が、同心一体となりてここに徹底するようになった大なる原因だ、つまり、抗日を通じて中国は初めて統一の方向に向かった。その原因をつくったのは日本の侵略である」ということを、彼は一九三八年、亡くなる直前のパンフレットの中で、遺言のようにして書いています。

事実、そのころから中国は、国民党と共産党が長い内戦をやめて統合され、多くの地方的な軍閥も、抗日のために統合されて、中華民国というのはかつてないほど統一された国家になるわけです。不幸にして日本の侵略の中で多くの傀儡的な政権が各地につくられ、または国共両党も戦争の末期になりますと、激しく対立するようになり、これが第二次世界大戦が終わると国共内戦として爆発し、中華人民共和国が成立した。そしてかつての中華民国の領土の大半が、チベットやウイグルを含めて統合されました。ただし、台湾は中

華民国として今でも存在して、分裂した状態が続いているわけです。

私は先日、日中関係史学会というところで、中国のシンクタンク集団の一人である人の報告を聞きました。その中で彼は台湾の問題に触れました。彼がいうには、台湾は古来から中国の領土である。そして外国は絶対に干渉すべきではない。中国は統一の伝統と意志と力を持っている。だから、我々は外国の干渉さえなければ、香港よりはずっと困難な課題ではあるけれども、香港と同じような一国二制度、「台人治台」という原則で平和的に統一できると信じている。もしこれを武力を行使して焦土にしてしまえば、祖先に申しわけない。平和的統一が絶対の原則なのだが、しかし我々が武力行使しないというと、外国の干渉があるから言えないのだと、彼はいっておりました。

そうはいっても事実としてやはり台湾の中に、中国人としてよりも台湾人としての意識が強く、統一に必ずしも賛成しない人がかなりいるようです。あるいはチベットやウイグルにおいて、統一が我々の伝統であり、我々の意志であるとチベット人やウィグル人がいえるのかどうか、やはり問題があるだろうと思います。中国のような広大な国土と多様な民族を持っている国の統一国家というのは、日本などと比べるとはるかに多くのいろいろな複雑な問題がある。あるいは、統合など必要がない、分裂した方がいいのだという意見もある。

この間『文芸春秋』で『ノーと言える日本』を書いた石原慎太郎とそれから莫さんもかかわった『ノーと言える中国』の作者が、激しい論争をやった。その中で石原氏が中国は分裂した方がいいのだ、四つ、五つに分裂した方がいいというふうに述べました。彼は現在政治家でもないし、大臣でもないからいいかもしれないが、日本の政治家や大臣がそういう発言をするのは、非常に大きな問題になる。やはり日本人としては、

かつて満州国をつくり、台湾を植民地支配して中国大陸から切り離した歴史を持つ日本人としては、中国の統一の問題については一切干渉しない、中国人が知恵を出し合って自分たちの問題を解決していくことを見守っていくというのが、日本人としては正しいのではないかと、私は思っています。統合の形態というのも、かつて毛沢東は連邦制ということを述べておりますけれども、僕などはそういう連邦制という形がいいのではないかという気持ちはあります。しかしそれは中国人が解決すべき問題だという原則を、徹底して守ることが必要だろうと思っています。

最後の問題である同盟、二国間同盟、他国間同盟の問題はもう時間がありませんので、報告は割愛し、可能なら討論のなかで、私の考えを申し上げたいと思います。

【二〇〇一年に思う】

このシンポジウム以降、日中の経済上の関係は益々密になり、深くなった。輸出入においても、資本の投下先としても、中国市場は日本経済にとってなくてはならぬ大きな存在になった。我々が毎日食べている食品、身につけている衣類品の中で、中国の産品は不可欠のものであり、これが失われたら大変なことになりかねない。中国の品や労働は安くて良質であり、生産拠点を中国に移す企業は非常に多くなっている。

人の往来も年々盛んになり、二〇〇〇年度には日本の訪中者が二二〇万人を越え、中国からの訪日者は三五万人余りに達した。国交回復時（一九七二年）の訪中者八千余人、訪日者約千人と対比して、まことに今昔の感がある。

この交流の拡大はたしかに日本人にとって中国を非常に身近なものとした。中国人にとっても日本人ほど

ではないにしても、同じことが言えるかも知れない。

しかし、これが互いの友好的な感情を促進したのか、といえば、首をかしげざるを得ない。近くなればなるほど問題もより多く発生する。安い中国野菜の氾濫が日本の農業経済を脅かし、農村を基盤とする議員の圧力によって、いわゆるセーフガードが発動され、中国が日本の工業製品に対して対抗措置をとったのは記憶に新しい。また、とくに、改革開放の深化が生み出した都市と農村の格差の拡大、日本と中国の物価水準の大きなちがい、物質的欲望の肥大化の中で、伝統的に海外に出て行くことが日常化していた主に福建沿海の一部住民がボロイ稼ぎ先として大量に日本に密航し、あるいは不法に滞在し、日本の不況の中でまともな仕事につけず、あるいはつかず、荒っぽい犯罪に走ることが頻発している。

日本のヤクザと組んでいる中国の密航手配師である「蛇頭」とか、チャイニーズ・マフィアなどの語は、日本人の日常語化さえしている。これに対する日本の庶民の不安や怒り、排外感情の高揚をとらえて、排外（とくに排中国）的ナショナリストである都知事が、これによる日本の安全の危機を強調して、かなりの支持を得ているなどのことがある。他方、中国人の大多数の中にはまだ過ぎし日本の侵略戦争によって家族、友人、知人、自身が受けた惨禍への記憶が払い難く残っており、語り伝えられている。これに対して明確な責任が取られぬままに、中国や韓国・朝鮮への侵略や植民地支配を肯定するような政治家の言説が発表され、のみならずこれと同質の中学生用の歴史教科書が、多くの修正を加えられたとはいえ、公認され、またA級戦犯をも合祀した靖国神社に首相が公式参拝することが伝えられた。これらを契機に「歴史の記憶」が呼び戻され、こういう後ろ向きのナショナリズムを否定できず、そのたかまりを容認しているかに見える日本国、日本人への不信が高まった。

これら日中両国国民、日中両国の市民の相互理解にとって非常に危険な事態は、経済面の交流、関係の深化、拡大という流れの中で、まだ取り返しのつかぬ所まではいっていない。中国に旅し、あるいは中国で仕事をし、あるいは、日本国内で中国の優秀な留学生やビジネスマンに接して、中国人に親近感をもち、両国の友好関係の重要性を肌で感じている日本人も多い。心の広い日本人に接している中国人にも同じことがいえるだろう。

日常の接触を更に拡大することを通じて、一部の現像をすべてととらえるような愚を避けて、冷静にごく普通の人間的関係を一歩一歩つくりあげ、広げていくことが良き未来への鍵であろう。当然、近代において日本軍国主義が中国、朝鮮、アジアに対して行った所業、これが相手に与えた痛みについて、国家のレベルではっきりした認識をもち、ケジメをつけることが「ごく普通の人間的関係」を作り出す前提であるだろう。